

第5回近藤賞

2015年3月27日(金) 2015年春季研究発表会(東京理科大学)にて、受賞記念講演(「均衡問題の数理モデル」福島雅夫氏)が予定されています。

近藤賞は、OR学会創立50周年記念事業の一つとして企画・創設されたものであり、賛助会員、正会員など多くの皆様の温かいご支援をいただいた基金をもとに運用されている。「近藤」賞という名前は、言うまでもなく、本学会元会長の近藤次郎先生に因むものである。近藤先生は、ORの分野では、PDPC(過程決定計画図)の発案や活用、国産航空機YS-11やYXの基本計画や収益シミュレーション・システムの開発などでご活躍されるとともに、国立公害研究所所長、日本学術会議会長等も歴任され、2002年には文化勲章を受賞されている。先生の幅広いご活躍に因み、広い意味でのORの分野の理論および実践に関して傑出した業績を挙げた個人またはグループに対して近藤賞が贈られる。これによって、わが国におけるORが一層発展し、この分野が広く社会に知られることが期待される。

第1回の近藤賞は、創立50周年記念式典の際に茨木俊秀関西学院大学教授に授与され、第2回は小島政和東京工業大学教授に、第3回は宮沢政清東京理科大学教授に、第4回は藤重悟京都大学名誉教授に授与された。

今回は第5回であり、機関誌やメールマガジン等を通じて候補者の推薦をお願いしたところ、締切日の2014年9月末までに多数の会員の方から候補者が推薦された。近藤賞の選考に関しては、会長が委員長となって選考委員会を構成することが規定されている。今回の選考委員会は大宮英明会長、腰塚武志前会長、茨木俊秀、今野浩、伏見正則、加藤直樹、室田一雄の各氏で構成され、慎重に検討を重ねた結果、福島雅夫氏(南山大学教授・京都大学名誉教授)が選出され、理事会で承認された。(肩書は受賞時のものです。)

第5回近藤賞選考理由

福島雅夫氏は、1974年に京都大学大学院修士課程を修了し、企業に半年間勤務後、京都大学、奈良先端科学技術大学院大学、南山大学において、非線形計画を中心として、変分方程式問題や相補性問題などの均衡問題、並列計算、微分不可能最適化などの最適化の理論とアルゴリズムの研究に取り組み、これらの成果を200本以上の論文にまとめ、JORSJ, Mathematical Programming, SIAM Journal on Optimization, Journal of Optimization Theory and Applications等国際的に権威のある学術誌に発表している。

福島氏が1981年に発表した論文では、近年盛んに機械学習や圧縮センシングなどの主流の解法の一つとして用いられている近接勾配法を提案しており、時代に先駆けた研究として高く評価されている。また、1992年の論文では、変分不等式問題に対するメリット関数を提案し、その後の均衡問題の理論や解法の開発の礎を築いている。それら以外にも非線形最適化や均衡問題の解法の開発において、独創的な発想に基づいた数多くの成果は、世界の研究者に大きな影響を与えており、2009年には「ISI Highly Cited Researcher in mathematics」に選出されるなど、非線形最適化の分野において世界をリードする研究者である。

福島氏は、中国、香港、米国などの著名研究者とともにPacific Optimization Research Activity Groupを立ち上げ、その会長を務め、さらにPacific Journal of Optimization誌を発行し、その編集長を務めるなど、アジア太平洋地域における数理最適化分野のコミュニティの活性化に中心的な役割を果たしている。また、そのグループ以外でも国際専門雑誌15誌において編集委員を務めるなど、数理最適化分野の学術発展と交流に尽力している。また、研究や学会活動にとどまらず、教育活動を通して、日本のオペレーションズリサーチの発展に貢献している。1つは、「数理計画入門」とその改訂版をはじめとする数理最適化に関する教科書を数多く執筆し、日本のオ



ペレージョンズリサーチの教育の一端を担ってきていることである。また、「非線形最適化の基礎」は、日本における非線形最適化の研究者の必読書となっており、福島氏が執筆したこれらの教科書を通して、日本の数理最適化のリテラシーおよび研究レベルが底上げされているといってもよい。また、2つ目は、京都大学、奈良先端大での長年の研究指導を通して、数多くの優れた研究者を育てていることである。

本学会においては、1992年から6年間論文誌編集委員、2002年から3年間数理計画研究部会（RAMP）主査を務めるなど、本学会の論文誌の充実や数理計画分野の研究推進に尽力した。

以上のように、傑出した業績を挙げた福島氏が第5回近藤賞の受賞者として最もふさわしいと判断した。

（第5回近藤賞選考委員会）

福島雅夫先生の第5回近藤賞受賞に寄せて

福島先生、このたびは近藤賞の受賞、おめでとうございます。お祝いの言葉を述べさせていただく機会を得ましたので、僭越ながら筆を執らせていただきます。

私が初めて福島先生にお会いしたのは、1993年夏のことでした。当時、会社員と南山大学大学院生の二足のわらじを履いていた私は、先生が担当された学部生向け夏期集中講義に潜り込んでいました。実は、学部生時代にシンプレックス法を学んだときは、原理がよくわからず、機械的にアルゴリズムを暗記していました。それが、福島先生の講義で手に取るように理解でき、そういうことだったのか！と感動して、そのまま授業に引き込まれていったのが20年以上も前のことになります。その後、会社を退職して博士後期課程に進学することを決意し、縁あって長きにわたり福島先生にご指導いただくことになりました。以来、本当に感謝の言葉もないぐらいお世話になっています。

奈良先端科学技術大学院大学および京都大学の福島研において、私たちはとても恵まれた環境で有意義な学生生活を送ることができました。福島先生のもとには、海外の研究者が頻繁に訪問され、それを身近に見ていた私たちは、国際的な素養を身につけることの必要性を強く感じていました。また、ゼミやディスカッションにおいて、研究の進め方や論文の書き方、研究発表の方法だけでなく、さまざまなことを自然と感じて学び取っていくことができたのは、厳しさの中にも優しさのある先生のご指導があったからこそと思います。

私たちが福島先生から学んだことは、研究に関連することだけに留まりません。先生のお人柄からたいへん多くのことを学ばせていただきました。先生は、国際的な研究グループの中核として活躍され、無名の若手研究者や学生の立場から見ると雲の上の存在でいらっしゃいます。しかし、先生はそんな人たちに対しても、来る者拒まず常に丁寧に対応されてこられました。そのような姿勢を通してこられたのは、先生ご自身が駆け出しの研究者だったころの経験に基づくものだというエピソードを京都大学の最終講義にて伺い、あらためて感銘を受けました。

福島先生は、平成25年3月に京都大学をご退職され、同年4月に南山大学情報理工学部（現理工学部）教授に就任されました。私自身も学生を指導する立場になって久しいですが、再び福島先生の身近で、研究・教育に携わる機会を得たことはたいへん貴重なことと思っています。何年修行しても福島先生の足元にも及びませんが、今後も精進し、謙虚さを忘れずに、先生から学んだことを学生（後進）たちに伝えていくことが、私たち福島研卒業生の使命と思っています。福島先生のますますのご活躍を祈念するとともに、人生の師でもある先生から今後も多くを学ばせていただこうという決意をもって、お祝いの言葉とさせていただきます。

佐々木美裕（南山大学理工学部）
